

カインの末裔

有島武郎

青空文庫

(一)

長い影を地にひいて、やせうま瘦馬のたづな手綱を取りながら、か彼れは黙りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包と一緒に、たこ章魚のように頭ばかり大きいあかんぼう赤坊をおぶつた彼れの妻は、少しちんば跛脚をひきながら三、四間も離れてその跡からとぼとぼとついて行つた。

北海道の冬は空までせま逼つていた。えぞふじ蝦夷富士といわれるマツカリヌプリのふもと麓に続くいぶり胆振の大草原を、日本海からうちうらわん内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せるうねり紆濤のように跡から跡から吹き払つていった。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリ

りは少し頭を前にこごめて風に齒向いながら黙つたまま突立つていた。昆布岳こんぶだけの斜面に小さく集つた雲の塊を眼がけて日は沈みかかつていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細いほど真直まっすぐな一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のようにいつまでも黙つて歩いた。馬が溺いばりをする時だけ彼れは不性無性ふしょうぶしょうに立どまつた。妻はその暇たぢにようやく追いついて背の荷せなかをゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすまずと二人はまた黙つて歩き出した。

「ここらおやじ（熊の事）が出るぞら」

四里にわたるこの草原の上で、たった一度妻はこれだけの事を

いった。慣れたものには時刻といい、ところから所柄ところがらといい熊の襲来を恐れる理由があつた。彼れはいまいましそうに草の中に唾つばを吐き捨てた。

草原の中の道がだんだん太くなつて国道に続く所まで来た頃には日は暮れてしまつていた。物の輪郭りんかくが円味まるみを帯びずに、堅いまま黒ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が来た。

着物は薄かつた。そして二人は餓うえ切きつていた。妻は気にして時々赤坊を見た。生きているのか死んでいるのか、とにかく赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまま黙つてた。

国道の上にはさすがに人影が一人二人動いていた。大抵は市街

地に出て一杯飲んでいたのらしく、行違いにしたたか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にえぐられるような渇きと食欲とを覚えて、すれ違つた男を見送つたりしたが、いまいましさに吐き捨てようとする睡はもう出て来なかつた。糊のりのように粘つたものが唇くちびるの合せ目をとじ付けていた。

内地ならば庚申塚こうしんづかか石地藏でもあるはずの所に、真黒になつた一丈もありそうな標示杭ひょうじくゐが斜めになつて立つていた。そこまひざかなで来ると干魚ひざかなをやく香においがかすかに彼れの鼻をうつたと思つた。彼れははじめて立停つた。瘦馬も歩いた姿勢をそのままにのそりと動かなくなつた。蠶たてがみと尻尾しりつぽだけが風に従つてなびいた。

「何んていうだ農場は」

背丈^{せた}けの凶^{せう}抜^ぬけて高い彼^{かれ}れは妻^{つま}を見^みおろすようにしてこうつぶやいた。

「松川農場たらいうだが」

「たらいうだ？ 白痴^{こけ}」

彼^{かれ}れは妻^{つま}と言^ご葉^はを交^まわしたのが癩^{しやく}にさわった。そして馬^{うま}の鼻^びをぐんと手綱^{てなわ}でしごいてまた歩^あき出^でした。暗^くらくなつた谷^やを距^{へだ}てて少し此^こ方^{うち}よりも高い位^ゐの平^{ひら}地^ちに、忘^われたよう^うに間^まを^あいてともされた市街^{しがい}地^ちのかすかな灯^ほ影^{かげ}は、人^{ひと}気^けのない所^{ところ}よりもかえつて自然^{しぜん}を淋^{しみ}しく見^みせた。彼^{かれ}れはその灯^ひを見^みるともう一^{いっ}種^{しゆ}のおびえを覚^{おぼ}えた。人^{ひと}の気^け配^{はい}をかぎつけると彼^{かれ}れは何^{なに}んとか身^みづくろい^いをしないではいられなかつた。自然^{しぜん}さがその瞬^{しゆん}間^{かん}に失^うわれた。それを意識^{いしぎ}

する事が彼れをいやが上にも、ぶつちようづら仏頂面にした。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面つらをしていやがって、尻子玉しりこたまでもひっこぬかれるな」とでもいいそうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帯をしめ直した。良人おっとの顔付きには気も着かないほど眼を落した妻は口をだらりと開けたまま一切無頓着でただ馬の跡について歩いた。

K市街地の町まちはず端れには空屋あきやが四軒までならんでいた。小さな窓は髑髏どくろのそのような真暗な眼を往来に向けて開いていた。五軒目には人が住んでいたがうごめく人影の間に囲炉裡いろりの根粗朶ねそだがちよろちよると燃えるのが見えるだけだった。六軒目には蹄鉄ていてつ屋やがあった。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中に

まじって火花が飛び散っていた。店は熔炉ようろの火口ひぐちを開いたように
 明るくて、馬鹿馬鹿しくだだっ広い北海道の七間道路が向側むこうがわ
 まではつきりと照らされていた。片側町ではあるけれども、とに
 かく家並があるだけに、強しいて方向むきを変えさせられた風の脚が意趣
 に砂まを捲あき上げた。砂は蹄鉄屋の前の火の光に照りかえされて濛も
 うもう
 々と渦巻く姿を見せた。仕事場の鞆ふいごの囲まわりには三人の男が働い
 ていた。鉄砧かなしきにあたる鉄槌かなづちの音が高く響くと疲れ果てた彼れ
 の馬さえが耳を立てなおした。彼れはこの店先きに自分の馬を引
 張つて来る時の事を思った。妻は吸い取られるように暖かそうな
 火の色に見惚みとれていた。二人は妙にわくわくした心持ちになった。
 蹄鉄屋の先きは急に闇こまが濃こまかくなつて大抵の家はもう戸じまり

をしていた。荒物屋あらものやを兼ねた居酒屋いざかやらしい一軒から食物の香と男女のふざけ返った濁声だみごえがもれる外ほかには、真直まっすぐな家並は廃村のように寒さの前にちぢこまって、電信柱だけが、けうとい唸りうなを立てていた。彼れと馬と妻とは前の通りに押黙つて歩いた。歩いては時折り思い出したように立停つた。立停つてはまた無意味らしく歩き出した。

四、五町歩いたと思うと彼らはもう町はずれに来てしまつていた。道がへし折られたように曲つて、その先きは、真闇まつくらな窪地くぼちに、急な勾配こうばいを取つて下つていた。彼らはその突角とつかくまで行つてまた立停つた。遙か下の方からは、うざうざするほど繁り合つた潤葉樹林かつようじゆりんに風の這入はいる音の外ほかに、シリベシ河のかすかな水

の音だけが聞こえていた。

「聞いて見ずに」

妻は寒さに身をふるわしながらこううめいた。

「汝^{われ}聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまった彼れの声は地の中からでも出て来たようだった。妻は荷をゆりあげて鼻をすすりすすり取つて返した。一軒の家の戸を^{たた}敲いて、ようやく松川農場のありかを教えてもらった時は、彼れの姿を見分けかねるほど遠くに来ていた。大きな声を出す事が何んとなく恐ろしかった。恐ろしいばかりではない、声を出す力さえなかった。そして^{ちんば}跛脚をひきひきまた返つて来た。

彼らは眠くなるほど疲れ果てながらまた三町ほど歩かねばならなかつた。そこに下見^{したみがこい}囿、板葺^{いたぶき}の真四角な二階建^{ほか}が外の家並を圧して立っていた。

妻が黙つたまま立留^{たちどま}つたので、彼れはそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほんとうをいうと彼れは始めからこの建物^たがそれにちがいないと思つていたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまつたのだ。もう進退窮^{きわま}つた。彼れは道の向側の立樹^{たちき}の幹に馬を繫^{つな}いで、燕^{からすむぎ}麦と雑草とを切りこんだ亜麻袋^{くらわ}を鞍輪^{くらわ}からほどいて馬の口にあてがつた。ぼりりぼりりという歯ぎれのいい音がすぐ聞こえ出した。彼れと妻とはまた道を横切つて、事務所の入口の所まで来た。そこで二人は不安

らしく顔を見合わせた。妻がぎごちなそうに手を挙げて髪をいじっている間に彼れは思い切つて半分ガラスになつてゐる引戸を開けた。滑車がけたたましい音をたてて鉄の溝を滑つた。がたぴしする戸ばかりをあつかい慣れてゐる彼れの手の力があまつたのだ。妻がぎよつとするはずみに背の赤坊も眼を覺して泣き出した。帳場にいた二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼れと妻とが泣く赤坊の始末もせずのそりと突立つていた。

「何んだ手前たちは、戸を開けつぱなしにしくさつて風が吹き込むでねえか。這入るのなら早く這入つて来う」

紺のあつしをセルの前垂れで合せて、檜の角火鉢の横座に坐

った男が眉まゆをしかめながらこう怒鳴どなった。人間の顔——殊ことにどこか自分より上手うわてな人間の顔を見ると彼れの心はすぐ不貞腐ふてくされるのだった。刃やいばに齒向うう獸のように捨鉢すてばちになつて彼れはのさのさと凶抜けて大きな五体を土間に運んで行つた。妻はおずおずと戸を閉しめて戸外に立つていた、赤坊の泣くのも忘れ果てるほどに氣を転倒させて。

声をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭くちひげの不似合な、長顔の男だった。農民の間で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るようなものだった。彼れの心は緊張しながらもその男の顔を珍らしげに見入らない訳には行かなかつた。彼れは辞儀一つしなかつた。

赤坊が縊^{くび}り殺されそうに戸の外で泣き立てた。彼れはそれにも
気を取られていた。

あがりがまち

上 框に腰をかけていたもう一人の男はやや暫^{しば}らく彼れの顔
を見つめていたが、浪花節^{なにわぶし}語りのような妙に張りのある声で突
然口を切った。

「お主は川森さんの縁^{ゆかり}のものじゃないんかの。どうやら顔が似と
るじゃが」

今度は彼れの返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場^{ちようば}さんにも川森から話^{はな}いたはずじゃがの。主^{ぬし}がの血筋を岩

田が跡に入れてもらいたいというてな」

また彼れの方を向いて、

「そうじやろがの」

それに違ひなかつた。しかし彼れはその男を見ると虫唾むしずが走つた。それも百姓に珍らしい長い顔の男で、禿はげ上あがつた額から左の半面にかけて火傷やけどの跡がてらてらと光り、下したまぶた 瞼まぶたが赤くべつらんこをしていた。そして唇くちびるが紙のように薄かつた。

帳場と呼ばれた男はその事なら飲み込めたという風に、時々上う眼わめで睨にらみ睨にらみ、色々な事を彼れに聞き糺ただした。そして帳場机の中から、美濃紙みのがみに細こまごま々と活字を刷つた書類を出して、それに広岡にんえもん仁右衛門という彼れの名と生れ故郷とを記入して、よく読んでから判を押せといつて二通つき出した。仁右衛門（これから彼れという代りに仁右衛門と呼ぼう）は固もとより明あきめくら盲めくらだったが、農場

でも漁場ぎよばでも鉱山でも飯を食うためにはそういう紙の端に盲判を押さなければならぬという事は心得ていた。彼れは腹がけどんぶりの井の中を探り廻わしてぼろぼろの紙の塊かたまりをつかみ出した。そして筍たけのこの皮を剥はぐように幾枚もの紙を剥がすと真黒になつた三文判がころがり出た。彼れはそれに息気いきを吹きかけて証書に孔あなのあくほど押しつけた。そして渡された一枚を判と一緒に井の底にしまつてしまつた。これだけの事で飯の種にありつけるのはありがたい事だつた。戸外では赤坊がまだ泣きやんでいなかつた。

「俺おら銭ぜにこ一文も持たねえからちよつぴり借りたいだが」

赤坊の事を思うと、急に小銭がほしくなつて、彼れがこういう出すと、帳場は呆あきれたように彼れの顔を見詰めた、——こいつは

馬鹿な面つらをしていくせに油断のならない横紙破りだと思いが
ら。そして事務所では金の借貸は一切しないから縁者になる川森
からでも借りるがいいし、今夜は何しろ其所そこに行つて泊めてもら
えと注意した。仁右衛門はもう向むか腹つばらを立ててしまつていた。
黙りこくつて出て行こうとすると、そこに居合わせた男が一緒に
行つてやるから待てととめた。そういわれて見ると彼れは自分の
小屋が何所どこにあるのかを知らなかつた。

「それじゃ帳場さん何分宜よろしゆう頼むがに、塩梅あんばいよう親方の方
にもいうてな。広岡さん、それじゃ行くべえかの。何とまあ孩児やや
の痛ましくさかぶぞい。じやまあおやすみ」

彼れは器用に小腰をかがめて古い手て提鞆さげかばんと帽子とを取上げた。

裾すそをからげて砲兵の古靴ふるぐつをはいている様子は小作人というよりも雑穀屋の鞞さやと取りだった。

戸を開けて外に出ると事務所のボンボン時計が六時を打った。びゅうびゅうと風は吹き募つつていた。赤坊の泣くのに困こじ果こてて妻はほつりと淋しそうに玉蜀黍とうきび殻の雪囲いの影に立っていた。

足場が悪いから気を付けろといいながら彼かの男は先きに立って国道から畦あぜ道みちに這は入いって行った。

大濤おおなみのようなうねりを見せた収穫後の畑地は、広く遠く荒涼として拡ひろがっていた。眼を遮さえぎるものは葉を落した防風林の細長い木立ちだけだった。ぎらぎらと瞬またたく無数の星は空の地じを殊ことごと更さらら寒く暗いものにしていた。仁右衛門を案内した男は笠井という小作

人で、天理教の世話人もしているのだといって聞かせたりした。

七町も八町も歩いたと思うのに赤坊はまだ泣きやまなかった。

縊くびり殺されそうな泣き声が反響もなく風に吹きちぎられて遠く流れて行つた。

やがて畦あぜみち道が二つになる所で笠井は立停つた。

「この道をな、こう行くと左手にさえて小屋が見えようがの。な」

仁右衛門は黒い地平線をすかして見ながら、耳に手を置き添えて笠井の言葉を聞き漏らすまいとした。それほど寒い風は激しい音で募っていた。笠井はくどくどとそこに行き着く注意を繰返して、しまい金いが要いるなら川森の保証で少し位は融通すると付加えるのを忘れなかった。しかし仁右衛門は小屋の所在が知れると

跡は聞いていなかた。餓えと寒さがひしひしと答え出してがたがた身をふるわしながら、挨拶一つせずさつさと別れて歩き出した。

とうきびがら

玉蜀黍殻とうきびがらといたどりの茎で囲いをした二間半四方ほどの小屋が、前のめりにかしいで、海月くらげのような低い勾配こうばいの小山の半腹に立っていた。物の饴すえた香と積肥つみごえの香ほしいままが擅ほしいままにただよっていた。小屋の中にはどんな野獣が潜んでいるかも知れないような気味悪さがあった。赤坊の泣き続ける暗闇の中で仁右衛門が馬の背からどすんと重いものを地面おろに卸す音がした。瘦馬は荷が軽くなるとううっせき鬱積うっせきした怒りを一時にぶちまけるように嘶いなないた。遙かの遠くでそれに応こたえた馬があった。跡は風だけが吹きすさんだ。

夫婦はかじかんだ手で荷物を提げながら小屋に這入った。永く火の気は絶えていても、吹きさらしから這入るとさすがに気持ちよく暖かかった。二人は真暗な中を手さぐりであり合せの古蓆ふるむしろや藁わらをよせ集めてどつかと腰を据えた。妻は大きな溜息をして背の荷と一緒に赤坊を卸して胸に抱き取った。乳房をあてがって見たが乳は枯れていた。赤坊は堅くなりかかった歯齧はぐきでいやというほどそれを噛んだ。そして泣き募った。

「腐孩子くされにが！ 乳首食いちぎるに」たたら

妻は慳貪けんどんにこういつて、懐ふところから塩煎餅しおせんべいを三枚出して、ぽりぽりと噛みくだいては赤坊の口にあてがった。

「俺おらがにも越くせ」

いきなり仁右衛門が猿臂えんぴを延ばして残りを奪い取ろうとした。二人は黙ったままで本気に争った。食べるものといつては三枚の煎餅しかないのだから。

「白痴たわけ」

吐き出すように良人がこういつた時勝負はきまっていた。妻は争い負けて大部分を掠りやくだつ奪たつされてしまった。二人はまた押黙つて闇の中で足たししない食物を貪むさぼり喰つた。しかしそれは結局食欲をそそのる媒な介なかだちになるばかりだった。二人は喰い終つてから幾度も固唾かたずを飲んだが火種のない所では南瓜かぼちゃを煮る事も出来なかつた。赤坊は泣きづかれに疲れてほっぴり出されたままに何時いつの間にか寝入っていた。

居鎮いしずまつて見ると隙間すきまもる風は刃やいばのように鋭く切り込んで来ていた。二人は申合せたように両方から近づいて、赤坊を間に入れて、抱寝だきねをしながら藁の中でががつと震えていた。しかしやがて疲労は凡てすべを征服した。死のような眠りが三人を襲った。

遠慮会釈もなく迅風はやては山と野とをこめて吹きすさんだ。漆うるしのよ
うな闇が大河の如くごと東へ東へと流れた。マツカリヌプリの絶巔ぜってん
の雪だけが燐光を放つてかすかに光っていた。荒らくれた大きな
自然だけがそこに甦よみがえつた。

こうして仁右衛門夫婦は、何処どこからともなくK村に現われ出て、
松川農場の小作人になった。

(一一)

仁右衛門の小屋から一町ほど離れて、K村からくつちやん俱知安に通う
 道路みちぞ添いに、佐藤与十という小作人の小屋があつた。与十という
 男は小柄で顔色も青く、何年たつてもとし齡をとらないで、働かきも甲
 斐いなそうに見えたが、子供の多い事だけは農場一だつた。あすこ
 のかかあ鼻は子種をよもらから貰つてでもいるんだらうと農場の若い者な
 どが寄るとじやうだん戯談を言い合つた。女房かせと言うのは体のがつしり
 した酒喰さけぐらいの女だつた。大人数なために稼かせいでも稼かせいでも貧乏
 しているの、だらしのない汚い風はしていたが、その顔付きは
 割合に整つていて、不思議に男せまに逼る淫いんとう蕩な色たをた湛たえていた。

仁右衛門がこの農場に這入った翌朝早く、与十の妻は袷一枚にぼろぼろの袖無しそでなを着て、井戸——といつても味噌樽みそだるを埋めたのに赤鏽あかさびの浮いた上層水うわみずが四分目ほど溜つてる——の所でアネチヨコといい慣わされた舶来の雑草の根に出来る薯いもを洗っていると、そこに一人の男がのそりとやって来た。六尺近い背丈せいを少し前こごみにして、營養の悪い土気色つちけいろの顔が真直に肩の上に乗つていた。当惑した野獣のようで、同時に何所かどこ奸わるがしこ譎あざわらい大きな眼が太い眉の下でぎろぎろと光っていた。それが仁右衛門だった。彼れは与十の妻を見ると一寸ちよつとほほえましい気分になつて、「おつかあ、火種べあつたらちよつぴり分けてくれずに」といった。与十の妻は犬に出遇つた猫のような敵意と落着きおちつを以もつ

て彼れを見た。そして見つめたまま黙っていた。

仁右衛門は脂やにのつまった大きな眼を手の甲で子供らしくこすりながら、

「俺らあすこの小屋さ来たもんだのし。乞食ほいとではねえだよ」

といつてにこにこした。罪のない顔になった。与十の妻は黙って小屋に引きかえしたが、真暗な小屋の中に臥ねみだ乱れた子供を乗りこえ乗りこえ囲いろり炉裡りの所に行つて粗朶そだを一本提げて出て来た。仁右衛門は受取ると、口をふくらましてそれを吹いた。そして何か一言二言話しあつて小屋の方に帰つて行つた。

この日も昨夜ゆうべの風は吹き落ちていかなかった。空は隅すみから隅すみまで底気味悪く晴れ渡っていた。そのために風は地面にばかり吹いて

いるように見えた。佐藤の畑はとにかく秋あきおこし耕をすましていたのに、それに隣となった仁右衛門の畑は見渡す限りかまどがえしとみずひきとあかざととびつかとで茫ぼうぼう々としていた。ひき残された大豆の殻からが風に吹かれて瓢ひょうきん軽な音を立てていた。あちこちにひよろひよると立った白樺しらかばはおおかた葉をふるい落してなよなよとした白い幹が風にたわみながら光っていた。小屋の前の亜麻をこいだ所だけは、こぼれ種から生えた細い茎が青い色を見せていた。跡は小屋も畑も霜のために白茶けた鈍い狐きつねいろ色だった。仁右衛門の淋しい小屋からはそれでもやがて白い炊煙がかすかに漏れはじめた。屋根からともなく囲いからともなく湯気のように漏れた。

朝食をすますと夫婦は十年も前から住み馴なれているように、平気な顔で畑に出かけて行つた。二人は仕事の手配もきめずに働いた。しかし、冬を眼の前にひかえて何を先きにすればいいかを二人ながら本能のよう知っていた。妻は、模様も分らなくなつた風呂敷ふうろしきを三角に折つて露西亞人ロシアじんのように頬ほおかむりをして、赤坊を背中に背負いこんで、せつせと小枝や根つこを拾つた。仁右衛門は一本の鍬くわで四町にあまる畑の一隅から掘り起しはじめた。外の小作人は野良のら仕事に片をつけて、今は雪ゆきがこい 囲こいをしたり薪を切つたりして小屋のまわりで働いていたから、畑の中に立っているのは仁右衛門夫婦だけだった。少し高い所からは何処どこまでも見渡される広い平坦な耕作地の上で二人は巢そこに帰り損そこねた二匹の蟻ありのよ

うにきりきりと働いた。果敢はかない労力に句点をうって、鋏さきの先きが日の加減でぎらつきらつと光った。津波のような音をたてて風のこもる霜枯れの防風林には鳥からすもいなかった。荒れ果てた畑に見切りをつけて鮭さけの漁場にでも移って行ってしまったのだろう。

昼少しまわった頃仁右衛門の畑に二人の男がやって来た。一人は昨夜事務所にいた帳場だった。今一人は仁右衛門の縁者という川森しじいさんだった。眼をしょぼしょぼさせた一徹らしい川森は仁右衛門の姿を見ると、怒ったらしい顔付をせずかかとその傍によつて行つた。

「汝わや辞儀一つ知らねえ奴の、何なん条じょう いうて俺らがには来くさ
らぬ。帳場さんのう知らしてくさずば、いつまでも知んようもね

えだつた。先ずもつて小屋さ行くべし」

三人は小屋に這はい入つた。入口の右手に寢藁ねわらを敷いた馬の居所と、皮板を二、三枚ならべた穀物置場があつた。左の方には入口の掘ほつたてばしら

立柱たちばしらから奥の掘立柱にかけて一本の丸太を土の上うへにわたして土間に麦藁を敷きならしたその上に、所々蓆むしろが拵むすげてあつた。その真中に切られた囲炉裡にはそれでも真黒まぐろに煤すすけた鉄瓶てつびんがかかつていて、南瓜かぼちやのこびりついた欠椀かけわんが二つ三つころがつていた。川森は恥はづれ入る如ごとく、

「やばつちい所で」

といいながら帳場を炉の横座よこざに招じた。

そこに妻もおずおずと這入つて来て、恐る恐る頭を下げた。そ

れを見ると仁右衛門は土間に向けてかつと唾を吐いた。馬はびくんとして耳をたてたが、やがて首をのばしてその香をかいだ。

帳場は妻のさし出す白湯さゆの茶碗を受けはしたがそのまま飲まずに蓆の上に置いた。そしてむずかしい言葉で昨夜の契約書の内容をいい聞かし初めた。小作料は三年ごとに書換えの一反歩二円二十銭である事、滞納には年二割五分の利子を付する事、村税は小作に割宛てる事、仁右衛門の小屋は前の小作から十五円で買つてあるのだから来年中に償還すべき事、さくあと作跡は馬うまおこし耕して置くべき事、亜麻は貸付地積の五分の一以上作つてはならぬ事、博奕ばくちをしてはならぬ事、隣保相助けねばならぬ事、豊作にも小作料は割増しをせぬ代りどんな凶作でも割引は禁ずる事、場主に直訴じきそが

ましいい事をしてはならぬ事、
 掠りやくだつ奪 農業をしてはならぬ事、
 それから云々、それから云々。

仁右衛門はいわれる事がよく飲み込めはしなかったが、腹の中
 では糞くそを喰くらえと思ひながら、今まで働いていた畑を気にして入
 口から眺めていた。

「お前は馬を持つてくるくせに何んだつて馬耕をしねえだ。幾いくんち日
 もなく雪になるだに」

帳場は抽象論から實際論に切込んで行つた。

「馬はあるが、プラオがねえだ」

仁右衛門は鼻の先きであしらつた。

「借りればいいでねえか」

「銭子ぜにこがねえかな」

会話はぷつんと途切とぎれてしまった。帳場は二度の会見でこの野蠻人をどう取扱わねばならぬかを飲み込んだと思った。面と向つて埒らちのあく奴ではない。うっかり女房にでも愛想を見せれば大おおご事とになる。

「まあ辛抱してやるがいい。ここの親方は函はこ館だての金持まるもちで物の解わかつた人だかな」

そういつて小屋を出て行つた。仁右衛門も戸外に出て帳場の元氣そうな後姿を見送つた。川森は財布から五十銭銀貨を出してそれを妻の手に渡した。何しろ帳場につけとどけをして置かないと万事に損が行くから今夜にも酒を買つて挨拶に行くがいいし、プ

ラオなら自分の所のものを借してやるといつていた。仁右衛門は川森の言葉を聞きながら帳場の姿を見守っていたが、やがてそれが佐藤の小屋に消えると、突然馬鹿らしいほど深い嫉妬しつとが頭を襲つて来た。彼れはかつと喉のどをからして痰たんを地べたにいやというほどはきつけた。

夫婦きりになると二人はまた別々になつてせつせと働き出した。日が傾きはじめると寒さは一ひとしお入いに募つて来た。汗になつた所々は氷るように冷たかつた。仁右衛門はしかし元気だつた。彼れの真ま闇くらな頭の中の一段高い所とも覚おぼしいあたりに五十銭銀貨がまんなまるく光つて如何どうしても離れなかつた。彼れは鋏を動かしながら眉をしかめてそれを払い落そうと試みた。しかしいくら試みて

も光った銀貨が落ちないのを知ると白痴ばかのようになつたりとひとり独

笑わらいを漏もらしていた。

昆布岳こんぶだけの一角には夕方になるとまた一ひとむら叢の雲が湧いて、そ

れを目がけて日が沈んで行つた。

仁右衛門は自分の耕した畑の広さを一わたり満足そうに見やつ

て小屋に歸つた。手ばしこく鍬を洗い、馬糧を作つた。そして鉢は

巻ちまきの下こつらににじんだ汗を袖そでぐち口ぬぐで拭つて、炊事にかかつた妻に先

刻の五十銭銀貨を求めた。妻がそれをわたすまでには二、三度横よ

面をなぐられねばならなかつた。仁右衛門はやがてぶらりと小

屋を出た。妻は独りで淋しく夕飯を食つた。仁右衛門は一片の銀

貨を腹がけどんぶりの井いに入れて見たり、出して見たり、親指で空はじに弾はじき

上げたりしながら市街地の方に出懸けて行つた。

九時——九時といえは農場では夜更よふけだ——を過ぎてから仁右衛門はいい酒機嫌で突然佐藤の戸口に現われた。佐藤の妻も晩酌に酔いしれていた。与十と鼎座ていざになつて三人は囲炉裡をかこんでまた飲みながら打解けた馬鹿話をした。仁右衛門が自分の小屋に着いた時には十一時を過ぎていた。妻は燃えかすれる囲炉裡火に背を向けて、綿のはみ出た蒲団ふとんを柏かしわに着てぐつすり寝込んでいた。仁右衛門は悪戯いたずら者らしくよろけながら近寄つてわつといつて乗りかかるように妻を抱きすくめた。驚いて眼を覚した妻はしかし笑いもしなかつた。騒ぎに赤坊が眼をさました。妻が抱き上げようとする、仁右衛門は遮りさえぎとめて妻を横抱きに抱きすくめてし

まった。

「そうれまんだ肝きもべ焼けるか。こう可愛めんこがられても肝べ焼けるか。可愛いめんこ獣けだもの物ぞい汝われは。見ずに。今いまにな俺おら汝に絹の衣装おべ着せてこそぞ。帳場の和郎わろ（彼れは所きらわず唾つばをはいた）が寝言ねごべこく暇ひまに、俺ら親方と膝つきあわして話して見せるかな。白痴こけ奴め。俺らが事誰れ知るもんで。汝わりや可愛いぞ。心から可愛いぞ。宜よし。宜し。汝やこれ嫌いでなかんべさ」

といいながら懐から折木へぎに包んだ大福を取出して、その一つをぐちやぐちやに押しつぶして息気いきのつまるほど妻の口にあてがつていた。

(三)

から風の幾日も吹きぬいた^{あげく}挙句に雲が青空をかき乱しはじめた。
 曇^{みぞれ}と日の光とが追いつ追われつして、やがて何所^{どこ}からともなく雪
 が降るようになった。仁右衛門の畑はそうなるまでに一部分しか
 耨^{すきおこ}起されなかつたけれども、それでも秋^{あきまき}播小麦を播^まきつける
 だけの地積は出来た。妻の勤労のお蔭^{かげ}で一冬^{ひとふゆぶん}分の燃料にも差^{さしつ}
 支^{かえ}ない準備は出来た。唯^{ただ}困^たるのは食料だった。馬の背に積んで
 来ただけでは幾日分の足^たしにもならなかつた。仁右衛門はある日
 馬を市街地に引いて行って売^あり飛^あばした。そして麦^{あわ}と粟^{あわ}と大豆と
 をかなり高い相場で買^あつて帰^あらねばならなかつた。馬がないので

馬車追いにもなれず、彼れは居食いぐいをして雪が少し硬くなるまで
ぼんやりと過していた。

ねゆき根雪になると彼れは妻子を残して木樵きこりに出かけた。マツカリ又

プリの麓ふもとの払はらい下官林に入りこんで彼れは骨身を惜まず働いた。

雪が解けかかると彼れは岩内いわないに出て鯿場にしんばかせ稼かせぎをした。そして

山の雪が解けてしまう頃に、彼れは雪焼けと潮焼けで真黒になつて帰つて来た。彼れの懐は十分重かつた。仁右衛門は農場に帰る

とすぐ逞たくましい一頭の馬と、プラオと、ハーローと、必要な種たね子を

買い調えた。彼れは毎日毎日小屋の前に仁王立におうだちになつて、五カ

月間積り重なつた雪の解けたために濃うみ放題うに濃うんだ畑から、恵

深い日の光に照らされて水蒸氣の濛もうもう々と立上る様を待ち遠しげ

に眺めやった。マツカリヌプリは毎日紫色に暖かく霞かすんだ。林の中の雪の叢むらぎ消えの間には福寿草ふくじゅそうの茎が先ず緑をつけた。つぐみとしじゅうからとが枯枝をわたってしめやかなささ啼なきを伝えはじめた。腐るべきものは木の葉といわず小屋といわず存分に腐っていた。

仁右衛門は眼路めじのかぎりに見える小作小屋の幾軒かを眺めやって糞くそでも喰くらえと思つた。未来の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年経たつた後には彼れは農場一の大小作おおこさくだつた。五年の後には小さいながら一箇の独立した農民だつた。十年目にはかなり広い農場を譲り受けていた。その時彼れは三十七だつた。帽子を被つて二重マントを着た、護謨長靴ゴムばきの彼れの姿が、自分ながら小恥こはずか

しいように想像された。

とうとう播種たねまきどき時が来た。山火事で焼けた熊笹くまざさの葉が真黒にこげて奇跡の護符のように何所どこからともなく降つて来る播種時が来た。畑の上は急に活気ごけだつた。市街地にも種物商や肥料商が入込んで、たつた一軒の曖昧屋ごげやからは夜ごとに三味線の遠音とわねが響くようになった。

仁右衛門は逞たくましい馬に、磨とぎすましたプラオをつけて、畑におりたつた。耒うぐいき起される土壌は適度の湿気をもつて、裏返るにつれてむせるような土の香を送つた。それが仁右衛門の血にぐんぐんと力を送つてよこした。

凡すべてが順当に行つた。播いた種は伸のびをするようにずんずん生い

育つた。仁右衛門はあたり近所の小作人に対して二言目には喧けんか嘩づら面を見せたが六尺ゆたかの彼れに楯たてつくものは一人もなかつた。佐藤なんぞは彼れの姿を見るとこそそと姿を隠した。「それ『まだか』が来おつたぞ」といつて人々は彼れを恐れ憚はばかつた。もう顔がありそうなものと見上げても、まだ顔はその上の方にあるというので、人々は彼れを「まだか」と譚あだな名なしていたのだ。

時々佐藤の妻と彼れとの関係が、人々の噂うわさに上るようになった。

一日働き暮すとさすが労働に慣れ切つた農民たちも、眼の廻るようなこの期節の忙しさに疲れ果てて、夕飯もそこそこに寝込んでしまつたが、仁右衛門ばかりは日が入つても手が痒かゆくてしよう

がなかつた。彼れは星の光をたよりに野獸のように畑の中で働き廻わつた。夕飯は囲炉裡の火の光でそこそこにしたためた。そうしてはぶらりと小屋を出た。そして農場の鎮守ちんじゆの社の傍の小作人集会所で女と会つた。

鎮守は小高い密樹林の中にあつた。ある晩仁右衛門はそこで女を待ち合わしていた。風も吹かず雨も降らず、音のない夜だつた。女の来ようは思いの外ほか早い事も腹の立つほどおそい事もあつた。仁右衛門はだだっ広い建物の入口の所で膝ひざをだきながら耳をそばだてていた。

枝に残つた枯葉が若芽にせきたてられて、時々かさつと地に落ちた。天鷲ビロード絨のように滑かな空気は動かないままに彼れをいたわ

るように押包んだ。荒くれた彼れの神経もそれを感じない訳には行かなかつた。物なつかしいようななごやかな心が彼れの胸にも湧いて来た。彼れは闇の中で不思議な幻覚に陥りながら淡くほえんだ。

足音が聞こえた。彼れの神経は一時に叢^{むらだ}立つた。しかしやがて彼れの前に立つたのはたしかに女の形ではなかつた。

「誰れだ汝^{わり}や」

低かつたけれども闇をすかして眼を据えた彼れの声は怒りに震えていた。

「お主こそ誰れだと思つたら広岡さんじやな。何んしに今時こないな所にいるのぞい」

仁右衛門は声の主が笠井の四国猿奴しこくざるめだと知るとかつとなつた。

笠井は農場一の物識ものしりで金持まるもちだ。それだけで癩かんしゃく癩しゃくの種には十分だ。彼れはいきなり笠井に飛びかかつて胸むなぐら倉をひつつかんだ。かーつと出して出した唾つばを危くその面かおに吐きつけようとした。

この頃浮浪人が出て毎晩集会所に集つて焚火たきびなどをやるから用心が悪い、と人々がいうので神社の世話役をしていた笠井は、おどかしつけるつもりで見廻りに来たのだつた。彼れは固もとより櫛かしの棒位の身じたくはしていたが、相手が「まだか」では口もきけないほど縮んでしまった。

「汝わりや俺おらが媾あいびき曳ひの邪魔まじりべこく気だな、俺らがする事ことに汝われが手だしはいんねえだ。首ねっこべひんぬかれんな」

彼れの言葉はせき上る息氣いきの間に押しひしやげられてがら
震えていた。

「そりや邪推じやがなぬしお主」

と笠井は口早にそこに来合せた仔細しさいと、丁度いい機会だから折入
つて頼む事がある旨をいいだした。仁右衛門は卑下して出た笠井
にちよつと興味を感じて胸倉から手を離して、鬨しきいに腰をすえた。

暗闇の中でも、笠井が眼をきよんとさせて火傷やけどの方の半面を平
手で撫なでまわしているのが想像された。そしてやがて腰を下おろして、
今までの慌あわてかたにも似にず悠ゆう々ゆうと煙草たばこ入いれを出してマツチを擦す
つた。折入つて頼むといつたのは小作一同の地主に対する苦情に
就いてであつた。一反歩二円二十銭の畑代はこの地方にない高相

場であるのに、どんな凶年でも割引をしないために、小作は一人として借金をしていないものはない。金では取れないと見ると帳場は立毛たちげの中に押収うちしてしまう。従つて市街地の商人からは眼の飛び出るような上前うわまえをはねられて食代くいしろを買わねばならぬ。だから今度地主が来たら一同では是非とも小作料の値下を要求するのだ。笠井はその総代になつているのだが一人では心細いから仁右衛門も出て力になつてくれというのであつた。

「白痴こけなことこくなてえば。二両二貫が何高たか値いべ。汝われたちが骨ほねねつぶしし節かせは稼かせぐようには造つてねえのか。親方には半文の借りもした覚えはねえからな、俺らその公事くじには乗んねえだ。汝われ先わず親方にべなつて見べし。ここのがよりも欲にかかるべえに。……芸も

ねえ事ことに可愛めんこくもねえ面つらつんだすなてば」

仁右衛門はまた笠井のてかてかした顔に唾をはきかけたい衝動にさいなまれたが、我慢してそれを板の間にはき捨てた。

「そうまあ一概にはいうもんでないぞい」

「一概にいったが何条なじよう悪いだ。去いね。去いねべし」

「そういえど広岡さん……」

「汝わりや拳固げんここと喰くらいていがか」

女を待ちうけている仁右衛門にとっては、この邪魔者の長居しているのがいまいましいので、言葉も仕打ちも段々あ荒ららかになつた。

執着の強い笠井も立たたなければならなくなつた。その場を取りつ

くろう世辞をいって怒った風も見せず坂を下りて行った。道の
一^{ふたまた}股^{また}になった所で左に行こうとすると、闇をすかしていた仁右
衛門は吼^ほえるように「右さ行くだ」と厳命した。笠井はそれにも
背^{そむ}かなかつた。左の道を通つて女が通つて来るのだ。

仁右衛門はまた独りになつて闇の中にうづくまつた。彼れは憤
りにぶるぶる震えていた。生^{あいにく}憎^{にく}女の来ようがおそかつた。怒つ
た彼れには我慢が出来きらなかつた。女の小屋に荒^{あば}れこむ勢で立
上ると彼れは白昼大道を行くような足どりで、藪^{やぶみち}道をぐんぐん
歩いて行つた。ふとある疎^{ぼさ}藪^さの所で彼れは野獣の敏感さを以て物
のけはいを嗅^かぎ知つた。彼れははたと立停つてその奥をすかして
見た。しんとした夜の静かさの中で悪^{からか}諺^かうような淫^{みだ}らな女の潜み

笑いが聞こえた。邪魔の入ったのを気取つて女はそこに隠れていたのだ。嗅ぎ慣れた女の臭いにおが鼻を襲つたと仁右衛門は思った。

「四つ足めが」

叫びと共に彼れは疎藪ほさの中に飛びこんだ。とげとげする触感が、寝る時のほか脱いだ事のない草鞋わらじの底に二足三足感じられたと思うと、四足目は軟いむっちりした肉体を踏みつけた。彼れは思わずその足の力をぬこうとしたが、同時に狂暴な衝動に駈かられて、満身の重みをそれに托たくした。

「痛い」

それが聞きたかつたのだ。彼れの肉体は一度に油をそそぎかけられて、そそり立つ血のきおいに眼がくるめいた。彼れはいきな

り女に飛びかかつて、所きらわず殴ったり足蹴あしげにしたりした。女は痛いといいつづけながらも彼れにからまりついた。そして噛かみついた。彼れはどうとう女を抱きすくめて道路に出た。女は彼れの顔に鋭く延びた爪をたてて逃れようとした。二人はいがみ合う犬のように組み合つて倒れた。倒れながら争つた。彼れはどうとう女を取逃がした。はね起きて追いにかかると一目散に逃げたと思つた女は、反対に抱きついて来た。二人は互に情に堪えかねてまた殴つたり引搔ひっかいたりした。彼れは女のたぶさを掴つかんで道の上をずるずる引張つて行つた。集会所に来た時は二人とも傷だらけになつていた。有頂天になつた女は一塊の火の肉となつてぶるぶる震えながら床の上につつ倒れていた。彼れは闇の中に突つ立ち

ながら焼くような昂奮こうふんのためによろめいた。

(四)

春の天気の順当であつたのに反して、その年は六月の初めから寒気いんこうと淫雨いんうとが北海道を襲つて来た。早魃かんぼつに饑饉ききんなしといひ慣わしたのは水田の多い内地の事で、畑ばかりのK村などは雨の多い方はまだ仕やすいとしたものだが、その年の長雨には溜息もらを漏さない農民はなかつた。

森も畑も見渡すかぎり真青になつて、掘立ほったて小屋こやばかりが色を変えずに自然をよごしていた。時雨しぐれのような寒い雨が閉ざし切つた

鈍色にびいろの雲から止途とめどなく降りそそいだ。低味ひくみの畦道あぜみちに敷ならべ

たスリツパ材はぶかぶかと水のために浮き上つて、その間から真ま

菰こもが長く延びて出た。蝸斗おたまじやくしが畑の中を泳ぎ廻つたりした。

郭公ほととぎすが森の中で淋しく啼ないた。小豆あずきを板の上に遠くでころが

すような雨の音が朝から晩まで聞えて、それが小休おやむと湿気を含んだ風が木でも草でも萎しぼましそうに寒く吹いた。

ある日農場主が函館はこだてから来て集会所で寄合うという知らせが

組長から廻まわつて来た。仁右衛門はそんな事には頓とんじやく着やくなく朝か

ら馬力ばりきをひいて市街地に出た。運送店の前にはもう二台の馬力が

あつて、脚をつまだてるようにしよんぼりと立つ輓馬ひきうまたの鬣たてがみは、

幾本かの鞭むちを下くだげたように雨によれて、その先きから水滴が絶え

ず落ちていた。馬の背からは水蒸気が立昇った。戸を開けて中には這入ると馬車追いを内職にする若い農夫が三人土間に焚火たきびをしてあたっていた。馬車追いをする位の農夫は農夫の中でも冒険的な気の荒い手合だった。彼らは顔にあたる焚火のほてりを手や足を挙げて防ぎながら、長雨につけこんで村に這入って来た博徒ばくとの群の噂うわさをしていた。捲まき上あげようとして這入り込みながら散々手を焼いて駄亭から追い立てられているような事もいった。

「お前も一番乗って儲もうかれや」

とその中の一人は仁右衛門をけしかけた。店の中はどんよりと暗く湿っていた。仁右衛門は暗い顔をして唾つばをはき捨てながら、焚火の座に割り込んで黙っていた。ぴしゃぴしゃと気疎けうとい草鞋わらじの音

を立てて、往來を通る者がたまさかにあるばかりで、この季節の賑にぎわい立だつた様子は何処どこにも見られなかつた。帳場の若いものは筆にぎわを持もつた手を頬ほ杖おづえにして居眠いつていた。こうして彼らは荷の來るのをぼんやりして二時間あまりも待ち暮した。聞くに堪えないような若者どもの馬鹿話も自然と陰気な氣分に押えつけられて、動やともすると、沈黙あと欠伸くびが拈あがつた。

「一はたりはたらずに」

突然仁右衛門がそういつて一座を見廻した。彼れはその珍らしい無邪氣な微笑をほほえんでいた。一同は彼れのにこやかな顔を見ると、吸い寄せられるようになって、いう事をきかないではいられなかつた。蓆むしろが持もち出された。四人は車座くるまざになつた。一人

は気軽に若い者の机の上から湯呑茶碗を持って来た。もう一人の男の腹がけの中からは骰子さいが二つ取出された。

店の若い者が眼をさまして見ると、彼らは昂奮こうふんした声を押しつぶしながら、無気むきになつて勝負に耽ふけつていた。若い者は一寸誘惑を感じたが気を取直して、

「困るでねえか、そうした事店頭みせさきでおつ広ひろげて」といふと、

「困つたら積荷こと探して来こう」
と仁右衛門は取り合なかつた。

昼になつても荷の回送はなかつた。仁右衛門は自分からいい出しながら、面白くない勝負ばかりしていた。何方どっちに変わるか自分で

も分らないような気分が 驀まつしぐら 地に悪い方に傾いて来た。気を腐
らせれば腐らすほど彼れのやまは外れてしまった。彼れはくさく
さしてふいと座を立つた。相手が何とかいうのを振向きもせず
店を出た。雨は小休おやみなく降り続けていた。昼餉ひるげの煙が重く地面の
上を這はつていた。

彼れはむしやくしやしなから馬力を引ぱつて小屋の方に帰つて
行つた。だらしなく降りつづける雨に草木も土もふやけ切つて、
空までがぼとりと地面の上に落ちて来そうにだらけていた。面白
くない勝負をして焦立いらだつた仁右衛門の腹の中とは全く裏合せな煮
え切きらない景色だった。彼れは何か思い切つた事をしてでも胸を
すかせたく思った。丁度自分の畑の所まで来ると佐藤の年嵩としかさの

子供が三人学校の帰途かえりと見えて、荷物を斜はすに背中に背負つて、頭からぐつしより濡れながら、近路ちかみちするため焯はの中を歩いていった。それを見ると仁右衛門は「待て」といつて呼びとめた。振向いた子供たちは「まだか」の立っているのを見ると三人とも恐ろしさに顔の色を変えてしまった。殴りつけられる時するように腕をまげて目八分の所にやつて、逃げ出す事もし得ないでいた。

「童子連わらしづれは何条なじよういうて他人ひとの焯はさ踏み込んだ。百姓ひやくしやうの餓鬼がきだに焯はのう大事だいじがる道知んねえだな。来こう」

仁王立におうだちになつて睨にらみすえながら彼かれれは怒鳴どなった。子供たちはもうおびえるように泣き出しながら恐おそず恐おそず仁右衛門の所に歩いて来た。待ちかまえた仁右衛門の鉄拳てつけんはいきなり十二ほどになる

長女の瘦やせた頬ほおをゆがむほどたたきつけた。三人の子供は一度に痛みを感じたように声を挙げてわめき出した。仁右衛門は長幼の容ようしや捨すなく手あたり次第に殴りつけた。

小屋に帰ると妻は蓆の上にペツたんこに坐つて馬にやる藁わらをざくりざくり切つていた。赤坊はいんちこの中で章魚たこのような頭を檻ぼろ褌ぼろから出して、軒から滴り落ちる雨垂れを見やつていた。彼れの気分きぶんにふさわない重苦みなぎしさが漲みなぎつて、運送店の店先くちらに較べては何から何まで便所べんじょのように穢きたなかった。彼は黙つたままで唾つばをはき捨てながら馬の始末しまつをするとすぐまた外に出た。雨は膚はだまで沁しみ徹とおつてぞくぞく寒さむかった。彼れの癩かんしやく癩しやくは更さららにつのつた。彼れはすたすたと佐藤の小屋に出かけた。が、ふと集会所に行つて

る事に気がつくとその足ですぐ神社をさして急いだ。

集会所には朝うちの中から五十人近い小作者が集つて場主の来るのを待つていたが、昼過ぎまで待ちぼけを喰くわされてしまった。場主はやがて帳場を伴ともにつれて厚い外がい套とうを着てやつて来た。上座かみざに坐ると勿もつ体たいらしく神社の方を向いて柏かしわ手を打つて黙拝をしてから、居合いあわせてる者らには半分も解らないような事をしたり顔にいい聞かした。小作者らはげんな顔をしながらも、場主の言葉が途切れると尤もつもらしくうなずいた。やがて小作者らの要求が笠井によつて提出せらるべき順番が来た。彼れは先ず親方は親で小作は子だと説き出して、小作者側の要求をかなり強くい張つた跡で、それはしかし無理な御願いだとか、物の解らない自分

たちが考える事だからだとか、そんな事は先ず後廻してもいい事だとか、自分のいい出した事を自分で打壊すような添そえことば言葉を付加えるのを忘れなかった。仁右衛門はちようどそこに行き合せた。彼れは入口の羽目板はめいたに身をよせてじつと聞いていた。

「こうまあ色々とお願ひしたじやからは、お互も心をしめて帳場さんにも迷惑をかけぬだけにはせずばなあ（ここで彼れは一同を見渡した様子だった）。『万国心をあわせてな』と天理教のお歌様にもある通り、定きまった事は定まったようにせんとならんじやが、多い中じやに無理もないようなもの、亜麻などを親方、ぎようさんつけたものもあつて、まこと済まん次第じやが、無理が通れば道理もひっこみよるで、なりませんじやもし」

仁右衛門は場規もかまわず畑の半分を亜麻にしていた。で、その言葉は彼れに対するあてこすりのように聞こえた。

「今日なども顔を出しよらん横道者よこしまものもありますすじやで……」

仁右衛門は怒りのために耳がかアんとなつた。笠井はまだ何か滑らかにしゃべっていた。

場主がまだ何か訓示めいた事をいうらしかつたが、やがてざわざわと人の立つ心配がした。仁右衛門は息氣いきを殺して出て来る人々を窺うかがった。場主が帳場と一緒に、後から笠井に傘かさをさしかけさせて出て行つた。労働で若年の肉を鍛きたえたらしい頑がんじょう丈な場主の姿は、何所どこか人を憚はばからした。仁右衛門は笠井を睨にらみながら見送つた。やや暫しばらくすると場内から急にくつろいだ談笑の音が

起つた。そして二、三人ずつ何か談り合ひながら小作者らは小屋をさして歸つて行つた。やや遅れて伴れもなく出て来たのは佐藤だつた。小さな後姿は若々しくつて青年のようだつた。仁右衛門は木の葉のように震えながらずかずかと近づくと、突然後ろからその右の耳のあたりを殴りつけた。不意を喰つて倒れんばかりによろけた佐藤は、跡も見ずに耳を押えながら、猛獸の遠吠を聞いた兎のように、前に行く二、三人の方に一目散にかけ出してその人々を楯に取つた。

「汝や乞食か盗賊か畜生か。よくも汝が餓鬼どもさ教唆けて他人の畑こと踏み荒したな。殴ちのめしてくれずに。来」

仁右衛門は火の玉のようになつて飛びかかった。当の二人と二、

三人の留とめおとこ男とは毬まりになつて赤土の泥の中をころげ廻つた。折
 重なつた人々がようやく二人を引分けた時は、佐藤は何所どこかした
 たか傷を負つて死んだように青くなつていた。仲裁したものはか
 かり合いからやむなく、仁右衛門に付添つて話をつけるために佐
 藤の小屋まで廻り道をした。小屋の中では佐藤の長女が隅すみの方に
 丸まつて痛い痛いといひながらまだ泣きつづけていた。炉ろを間に
 置いて佐藤の妻と広岡の妻とはさし向いに罵ののしり合あつていた。佐藤
 の妻は安座あぐらをかいて長い火箸ひばしを右手に握つていた。広岡の妻も背
 に赤ん坊を背負つて、早口にいい募もつていた。顔を血だらけにし
 て泥まみれになつた佐藤の跡から仁右衛門が這入つて来るのを見
 ると、佐藤の妻は訳を聞く事もせずにかたがた震える齒かを噛み合

せて猿のように唇くちびるの間からむき出しながら仁右衛門の前に立ちはだかつて、飛び出しそうな怒りの眼で睨にらみつけた。物がいえなかつた。いきなり火箸を振上げた。仁右衛門は他愛もなくそれを奪い取った。噛みつこうとするのを押しつけた。そして仲裁者が一杯飲もうと勧めるのも聴かずに妻を促して自分の小屋に帰って行った。佐藤の妻は素す跣はだしのまま仁右衛門の背に罵ののし詈りを浴せながら怒フューリー精リのようについて来た。そして小屋の前に立ちはだかつて、
こえす轉ころるように半ば夢中で仁右衛門夫婦を罵りつづけた。

仁右衛門は押黙ったまま困い炉ろ裡りの横座よこざに坐つて佐藤の妻の狂態を見つめていた。それは仁右衛門には意外の結果だった。彼れの気分は妙にかたづかないものだった。彼れは佐藤の妻の自分から

突然離れたのを怒ったりおかしく思ったり惜おしんだりしていた。仁右衛門が取合われないので彼女はさすがに小屋の中には這入らなかつた。そして皺しわが枯れた声でおめき叫びながら雨の中を帰って行つてしまった。仁右衛門の口の辺にはいかにも人間らしい皮肉な歪ゆがみが現われた。彼れは結局自分の智慧ちえの足りなさを感じた。そしてままよと思つていた。

すべ凡ての興味が全く去つたのを彼れは覺えた。彼れは少し疲れていた。始めて本統ほんとうの事情を知つた妻から嫉妬しつとがましい執拗しつこい言葉でも聞いたら少しの道楽どうらくげ気もなく、どれほどな残酷な事でもやり兼ねないのを知ると、彼れは少し自分の心を恐れねばならなかつた。彼れは妻に物をいう機会を与えないために次から次へと

命令を連発した。そして晩いおそ昼飯をしたたか喰った。がらつと箸はしを措くと泥だらけなびしよぬれな着物のままでまたぶらりと小屋を出た。この村に這入りこんだ博徒らの張つていた賭場とばをさして彼の足はしよう事なしに向いて行つた。

(五)

よくこれほどあるもんだと思わせた長雨も一カ月ほど降り続いてようや漸く晴れた。一足飛びに夏が来た。何時いつの間にも花が咲いて散つたのか、天気になって見ると林の間にある山桜も、辛夷こいぶしも青々とした広葉になっていた。蒸風呂のような気持ちの悪い暑さが襲つ

て来て、畑の中の雑草は作物を乗りこえて葎むぐらのように延びた。雨のため傷いためられたに相異ないと、長雨のただ一つの功德くどくに農夫らのいい合つた昆こんちゆう虫も、すさまじい勢で発生した。甘藍キャベツのまわりにはえぞしろちようが夥おびただしく飛び廻つた。大豆だいずにはくちかきむしの成虫がうぎうぎするほど集まつた。麦類には黒穂の、馬ばれい鈴薯しよにはべと病の徴候が見えた。虻あぶと蝸ぶよとは自然の斥候せっこうのようにもやもやと飛び廻つた。濡れたままに積重ねておいた汚れ物をかけわたした小屋の中からは、あらん限りの農夫の家族が武具えものを持って畑に出た。自然に菌向う必死な争鬪の幕は開かれた。

鼻歌も歌わずに、汗を肥料のように畑の土に滴らしながら、農夫は腰を二つに折って折って地面に嚙かじり付いた。耕馬は首を下げられる

だけ下げ、乾き切らない土の中に脚を深く踏みこみながら、絶えず尻尾しりつぽで虻を追った。しゅつと音をたてて襲つて来る毛の束にしたたか打れた虻は、血を吸つて丸くなつたまま、馬の腹からぽとりと地に落ちた。仰向けあおむになつて鋼線はりがねのような脚を伸したり縮めたりして藻掻くもが様は命の薄れるもののように見えた。暫くしばらするとしかしそれはまた器用はねに翅を使つて起きかへつた。そしてよろよろと草の葉裏に這いよつた。そして十四、五分の後にはまた翅をはつてうなりを立てながら、眼を射るような日の光の中に勇ましく飛び立つて行つた。

夏物が皆無作というほどの不出来であるのに、亜麻だけは平年作位にはまわつた。青天鷺絨あおじろの海となり、瑠璃色るりいろの絨じゅうたん氈たんとな

り、荒くれた自然の中の姫君なる亜麻の畑はやがて小紋こもんのような果みをその繊細な茎の先きに結んで美しい狐色に変わった。

「こんなに亜麻をつけては仕様しようがねえでねえか。畑が枯れて跡地には何んだって出来はしねえぞ。困るな」

ある時帳場が見廻つて来て、仁右衛門にこういった。

「俺おらも困るだ。汝われが困ると俺おららが困るとは困りようが土台ちがわい。口が干上ひあがるんだあぞ俺おららがのは」

仁右衛門は突慳つっけんどん貪どんにこういい放つた。彼れの前にあるおきては先ず食う事だった。

彼れはある日亜麻の束を見上げるように馬力ばりきに積み上げて俱くつち知安やんの製線所に出かけた。製線所では割合はかりに斤目をよく買つて

くれたばかりでなく、他の地方が不作なために結実がなかったの
で、あまだね亜麻種を非常な高値たかねで引取る約束をしてくれた。仁右衛門の
懐の中には手取り百円の金が暖くしまわれた。彼れは畑にまだし
こたま残つている亜麻の事を考えた。彼れは居酒屋に這入はいつた。
そこにはK村では見られないような綺麗きれいな顔をした女もいた。仁
右衛門の酒は必ずしも彼れをきまつた型には酔わせなかつた。或
る時は彼れを怒りつぽく、或る時は悒鬱ゆううつに、或る時は乱暴に、
或る時は機嫌よくした。その日の酒は勿論もちろん彼れを上機嫌にした。
一緒に飲んでいるものが利害関係のないのも彼れには心置きがな
かつた。彼れは酔うままに大きな声で戯談じょうだんぐち口をきいた。そう
いう時の彼れは大きな愚かな子供だつた。居合せたものはつり込

まれて彼れの周囲に集つた。女まで引張られるままに彼れの膝に倚りかかつて、彼れの頬ずりを無邪氣に受けた。

「汝がの頬に俺が髭こ生えたらおかしかんべなし」

彼れはそんな事をいつた。重いその口からこれだけの戯談が出ると女などは腹をかかえて笑つた。陽がかげの頃に彼れは居酒屋を出て反物屋によつて華手なモスリンの端切れを買つた。またビールの小瓶を三本と油糟とを馬車に積んだ。俱知安からK村に通う国道はマツカリヌプリの山裾の椴松帯の間を縫つていた。彼れは馬力の上に安座をかいて瓶から口うつしにビールを煽りながら濁歌をこだまにひびかせて行つた。幾抱えもある椴松は羊齒の中から真直に天を突いて、僅かに覗かれる空には昼

月が少し光って見え隠れに眺められた。彼れは遂に馬力の上に酔い倒れた。物慣れた馬は凸凹の山道を上手に拾いながら歩いて行った。馬車はかしいだり跳ねたりした。その中で彼れは快い夢に入ったり、面白い現うつつに出たりした。

仁右衛門はふと熟睡から破られて眼をさました。その眼にはすぐ川森じい爺さんの真面目まじめくさつた一徹な顔が写つた。仁右衛門の軽い気分にはその顔が如何いかにもおかしかつたので、彼れは起き上りながら声を立てて笑おうとした。そして自分が馬力の上において自分の小屋の前に来ている事に気がついた。小屋の前には帳場も佐藤も組長の某もいた。それはこの小屋の前では見慣れない光景だった。川森は仁右衛門が眼を覚ましたのを見ると、

「早う内さ行くべし。汝が嬰子はおつ死ぬべえぞ。赤痢さとツつかれただ」

といった。他愛のない夢から一足飛びにこの恐ろしい現実に呼びさまされた彼れの心は、最初に彼れの顔を高笑いにくずそうとしたが、すぐ次ぎの瞬間に、彼れの顔の筋肉を一度氣にひきしめてしまった。彼れは顔中の血が一時に頭の中に飛び退いたように思った。仁右衛門は酔いが一時に醒めてしまつて馬力から飛び下りた。小屋の中にはまだ二、三人人がいた。妻はと見ると虫の息に弱つた赤坊の側に蹲つておいおい泣いていた。笠井が例の古靴を膝に引つけてその中から護符のようなものを取出していた。

「お、広岡さんええ所に帰つたぞな」

笠井が逸いちはや早く仁右衛門を見付けてこういふと、仁右衛門の妻は恐れるように怨うらむように訴えるように夫を見返つて、黙つたまま泣き出した。仁右衛門はすぐ赤坊の所に行つて見た。章魚たこのよ
うな大きな頭だけが彼れの赤坊らしい唯ただ一つのものだつた。たつ
た半日の中うちにこうも変わるかと疑われるまでにその小さな物は衰え
細こつていた。仁右衛門はそれを見ると腹が立つほど淋こころもしく心
許となくなつた。今まで経験した事のないなつかしさ可愛さが焼
くように心に逼せまつて来た。彼れは持った事のないものを強いて押
付けられたように当惑してしまつた。その押付けられたものは恐
ろしく重い冷たいものだつた。何よりも先ず彼れは腹の力の抜け
て行くような心持ちをいまいましく思つたがどうしようもなかつ

た。

もつたい
勿体ぶつて笠井が護符を押しただき、それで赤坊の腹部を呪

ゆもん
文を称えながら撫なで廻わすのが唯一の力に思われた。傍にいる

人たちも奇蹟の現われるのを待つように笠井のする事を見守つて

いた。赤坊は力のない哀れな声で泣きつづけた。仁右衛門は腸はらわたを

むしられるようだった。それでも泣いている間はまだよかった。

赤坊が泣きやんで大きな眼を引つらしたまま瞬まばたきもしなくなると、

仁右衛門はおぞましくも拝むような眼で笠井を見守つた。小屋の

中は人いきれで蒸すように暑かった。笠井の禿はげあが上つた額からは

汗の玉がたらたらと流れ出た。それが仁右衛門には尊くさえ見え

た。小半時こはんとき赤坊の腹を撫で廻わすと、笠井はまた古靴の中から

紙包を出して押いただいた。そして口に手拭てぬぐいを喰わえてそれを開くと、一寸四方ほどな何か字の書いてある紙片を摘つまみ出して指の先きで丸めた。水を持って来さしてそれをその中へ浸した。仁右衛門はそれを赤坊に飲ませろとさし出されたが、飲ませるだけの勇氣もなかった。妻は甲斐か甲斐いしく良人おとに代った。渴き切つていた赤坊は喜んでそれを飲んだ。仁右衛門は有難いと思つていた。「わしも子は亡なくした覚えがあるで、お主の心持ちはようわかる。この子を助けようと思つたら何せ一心に天理王様に頼まっしゃれな。合点か。人間業わやでは及ばぬ事じゃでな」

笠井はそういつてしたり顔をした。仁右衛門の妻は泣きながら手を合せた。

赤坊は続けさまに血を下した。そして小屋の中が真暗になった。日のくれぐれに、何物にか助けを求め、成人おとなのような表情を眼に現わして、あてどもなくそこらを見廻していたが、次第次第に息が絶えてしまった。

赤坊が死んでから村医は巡査つに伴つられて漸ようやくやって来た。香こ奠うでん代りの紙包を持って帳場も来た。提ちようちん灯ちんという見慣れないものが小屋の中を出たり這はい入いったりした。仁右衛門夫婦の嗅かぎつけない石炭酸の香は二人を小屋から追出してしまった。二人は川森に付添われて西に廻った月の光の下にしよんぼり立った。

世話に来た人たちは一人去り二人去り、やがて川森も笠井も去ってしまった。

水を打ったような夜の涼しさと静かさとの中にかすかな虫の音がしていた。仁右衛門は何という事なしに妻が癩しやくにさわってたまらなかつた。妻はまた何という事なしに良人おっとが憎まれてならなかつた。妻は馬力の傍にうずくまり、仁右衛門はあてもなく唾つばを吐き散らしながら小屋の前を行ったり帰ったりした。よその農家でこの凶事があつたら少くとも隣近所から二、三人の者が寄り合つて、買って出した酒でも飲みちらしながら、何かと話でもして夜を更ふかすのだらう。仁右衛門の所では川森さえ居残っていないのだ。妻はそれを心から淋しく思つてしくしくと泣いていた。物の三時間も二人はそうしたままで何もせず**に**ぼんやり小屋の前で月の光にあわれな姿をさらしていた。

やがて仁右衛門は何を思い出したのかのそのそと小屋の中に這入って行つた。妻は眼に角かどを立てて首だけ後ろに廻わして洞穴のような小屋の入口を見返つた。暫しばらくすると仁右衛門は赤坊を背負つて、一丁の鍬くわを右手に提さげて小屋から出て来た。

「ついて来こう」

そういつて彼れはすたすたと国道の方に出て行つた。簡単な啼なきぎこえ声こゑで動物と動物とが互たがいを理解し合うように、妻は仁右衛門のしようとする事が呑み込めたらしく、のっそりと立上つてその跡に随したがつた。そしてめめそめそと泣き続けていた。

夫婦が行き着いたのは国道を十町も俱くつ知安ちあんの方に来た左手の岡の上にある村の共同墓地だつた。そこの上からは松川農場を一

面に見渡して、ルベシベ、ニセコアンの連山も川向いの昆布岳こんぶだけも手に取るようだった。夏の夜の透明な空気は青み亘わたつて、月の光が燐のように凡すべての光るものの上に宿っていた。蚊かの群がわんわんうなつて二人に襲いかかった。

仁右衛門は死体を背負つたまま、小さな墓標や石塔の立たちつらな列

つた間の空地に穴を掘りだした。鍬の土に喰い込む音だけが景色に少しも調和しない鈍い音を立てた。妻はしやがんだままで時々ほお頬ほおに来る蚊をたたき殺しながら泣いていた。三尺ほどの穴を掘り終ると仁右衛門は鍬の手を休めて額の汗を手の甲で押拭おしぬぐつた。夏の夜は静かだった。その時突然恐ろしい考が彼れの吐胸とむねを突いて浮んだ。彼れはその考に自分ながら驚いたように呆あきれて眼を見

張っていたが、やがて大声を立てて頑童がんどうの如く泣きおめき始めた。その声は醜ものすげく物凄ものすげかった。妻はきよつとんとして、顔中を涙にしなから恐ろしげに良人おっとを見守った。

「笠井の四国猿めが、嬰子にが事殺しただ。殺しただあ」

彼れは醜い泣声の中からそう叫んだ。

翌日彼れはまた亜麻の束を馬力に積もうとした。そこには華手はでなモスリンの端切れはぎが乱雲の中に現われた虹にじのようにしつとり朝露にしめつたまま穢きたない馬力の上にしまい忘られていた。

狂暴な仁右衛門は赤坊を亡くしてから手がつけられないほど狂暴になった。その狂暴を募らせるように烈しい盛夏が来た。春先の長雨を償うように雨は一滴も降らなかつた。秋に収穫すべき作物は裏葉が片端から黄色に変つた。自然に抵抗し切れない失望の声が、黙りこくつた農夫の姿から叫ばれた。

一刻の暇もない農繁の真最中に馬市が市街地に立つた。普段ならば人々は見向きもしないのだが、畑作をなげてしまつた農夫らは、捨鉢すてばちな気分になつて、馬の売買にでも多少の儲もうけを見ようとしたから、前景気は思いの外強ほかかつた。当日には近村からさ見え物が来たほど賑にぎわつた。丁度農場事務所裏の空地あきちに仮小屋が建てられて、爪つめまで磨き上げられた耕馬が三十頭近く集まつた。その

中で仁右衛門の出した馬は殊に人の眼を牽ひいた。

その翌日には競馬があつた。場主までわざわざ函はこ館だてからやつ

て来た。屋台店や見世物小屋がかかつて、祭礼に通有な香のむしむしする間を着飾つた娘たちが、刺戟しげきの強い色を振播ふりまいて歩いた。

競馬場の埒らちの周囲は人垣で埋つた。三、四軒の農場の主人たちは決勝点の所に一段高く棧敷さじきをしつらえてそこから見物した。松

川場主の側には子供に付添つて笠井の娘が坐つていた。その娘は二、三年前から函館に出て松川の家いへに奉公していたのだ。父に似て細ほそ面おもての彼女は函館の生活に磨きをかけられて、この辺では際立つて垢あかぬ抜けがしていた。競馬に加わる若い者はその妙齡な娘の前で手柄を見せようと争つた。他人ひとの妾めかけに目星をつけて何にな

ると皮肉をいうものもあつた。

何しろ競馬は非常な景気だつた。勝負がつく度に揚る喝采かつさいの
声は乾いた空気を伝わつて、人々を家の内にじつとさしては置か
なかつた。

仁右衛門はその頃博奕ばくちに耽ふけつていた。始めの中うちはわざと負けて
見せる博徒の手段に甘々うまうまと乗せられて、勢い込んだのが失敗の
基もとで、深入りするほど損をしたが、損をするほど深入りしないで
はいられなかつた。亜麻の収利とくは疾とつの昔にけし飛んでいた。それ
でも馬は金輪際こんりんざい売いる気がなかつた。剩あます所は燕からすむぎ麦むぎがあるだ
けだつたが、これは播種たねまき時ときから事務所と契約して、事務所から
一手に陸軍糧秣りようまつしやう廠しょうに納める事になつていた。その方が競争

して商人に売るのよりも割がよかつたのだ。商人どもはこのボー
コツトを如何どうして見過していよう。彼らは農家の戸別訪問をして
糧秣廠よりも遙かに高価に引受けると勧誘した。糧秣廠から買入
代金が下つてもそれは一応事務所にまとまって下るのだ。その中
から小作料だけを差引いて小作人に渡すのだから、農場としては
小作料を回収する上にこれほど便利な事はない。小作料を払うま
いと決心している仁右衛門は馬鹿な話だと思つた。彼れは腹をき
めた。そして競馬のために人の注意がおろそかになつた機会を見
すまして、商人と結托して、事務所へ廻わすべき燕麦をどんどん
商人に渡してしまつた。

仁右衛門はこの取引をすましてから競馬場にやつて来た。彼れ

は自分の馬で競走に加わるはずになっていたからだ。彼れは裸乗りの名人だった。

自分の番が来ると彼れは鞍くらも置かずに自分の馬に乗って出て行った。人々はその馬を見ると敬意を払うように互にうなずき合つて今年の糶せりでは一番物だと賞め合つた。仁右衛門はそういう私ささや語きを聞くといひ気持ちになつて、いやでも勝つて見せるぞと思つた。

六頭の馬がスタートに近づいた。さつと旗が降りた時仁右衛門はわざと出してくれた。彼れは外の馬の跡から内埒うちわへ内埒へとよつて、少し手綱たづなを引きしめるようにして駈かけさした。ほてつた彼の顔から耳にかけて埃ほこりを含んだ風が息気いきのつまるほどふきかかゝるのを彼れは快く思つた。やがて馬場ばばを八分目ほど廻つた頃を計はか

つて手綱をゆるめると馬は思い存分頸を延ばしてずんずんおくれた馬から抜き出した。彼れが鞭とあおりで馬を責めながら最初から目星をつけていた先頭の馬に追いせまった時には決勝点が近かった。彼れはいらだつてびしびしと鞭をくれた。始めは自分の馬の鼻が相手の馬の尻とすれすれになつていたが、やがて一步一步二頭の距離は縮まった。狂気のような喚呼が夢中になつた彼れの耳にも明かに響いて来た。もう一息と彼れは思った。——その時突然棧敷の下で遊んでいた松川場主の子供がよたよたと埒の中へ這入った。それを見た笠井の娘は我れを忘れて駈け込んだ。「危ねえ」——観衆は一度に固唾を飲んだ。その時先頭にいた馬は娘の華手な着物に驚いたのか、さつときれて仁右衛門の馬の前に出

た。と思う暇もなく仁右衛門は空中に飛び上つて、やがて敲たたきつけられるように地面に転がっていた。彼れは氣き丈じょうにも転がりながらすすくと起き上つた。直ぐ彼れの馬の所に飛んで行つた。馬はまだ起きていなかつた。後あと趾あしで反動を取つて起きそうにしては、前脚を折つて倒れてしまつた。訓練のない見物人は潮うしおのように仁右衛門と馬とのまわりに押寄せた。

仁右衛門の馬は前脚を二足とも折つてしまつていた。仁右衛門は惘ぼんやり然なりしたまま、不思議ふしぎ相そうな顔をして押寄せた人波を見守つて立つてる外ほかはなかつた。

獣医の心得もある蹄鉄ていてつや屋の顔を群集の中に見出してようやく正氣に返つた仁右衛門は、馬の始末を頼んですごすごと競馬場を

出た。彼れは自分で何が何だかちつとも分らなかつた。彼れは夢遊病者のように人の間を押分けて歩いて行つた。事務所の角まで来ると何という事なしにいきなり路のみち小石を二つ三つつか掴んで入口の硝子戸ガラスどにたたきつけた。三枚ほどの硝子は微塵みじんにくだけて飛び散つた。彼れはその音を聞いた。それはしかし耳を押えて聞くように遠くの方で聞こえた。彼れは悠々ゆうゆうとしてまたそこを歩み去つた。

彼れが気がついた時には、何方どっちをどう歩いたのか、昆布岳の下を流れるシリベシ河の河岸の丸石に腰かけてほんやり河面かわづらを眺めていた。彼れの眼の前を透明な水が跡から跡から同じような渦か紋もんを描いては消し描いては消して流れていた。彼れはじつとその

戯れを見詰めながら、遠い過去の記憶でも追うように今日の出来事を頭の中で思い浮べていた。凡ての事が他人事ひとごとのように順序よく手に取るように記憶に甦よみがえった。しかし自分が放り出される所まで来ると記憶の糸はぷつぷつ切れてしまった。彼れはその所を幾度も無関心に繰返した。笠井の娘——笠井の娘——笠井の娘がどうしたんだ——彼れは自問自答した。段々眼がかすんで来た。笠井の娘……笠井……笠井だな馬を片輪かたわにしたのは。そう考えても笠井は彼れに全く関係のない人間のようにだった。その名は彼れの感情を少しも動かす力にはならなかった。彼れはそうしたままに深い眠りに落ちてしまった。

彼れは夜中になってからひよつくり小屋に帰って来た。入口か

らぶんと石炭酸の香がした。それを嗅ぐと彼れは始めて正氣に返つて改めて自分の小屋を物珍らしげに眺めた。そうなると彼れは夢からさめるようにつまらない現実に歸つた。鈍つた意識の反動として細かい事にも鋭く神経が働き出した。石炭酸の香は何よりも先ず死んだ赤坊を彼れに思い出さした。もし妻に怪我でもあつたのではなかつたか——彼れは炉の消えて真闇な小屋の中を手さぐりで妻を尋ねた。眼をさまして起きかえつた妻の氣配がした。「今頃まで何所さいただ。馬は村の衆が連れて歸つたに。傷しい事べおつびろげてはあ」

妻は眠っていないなかつたようなはつきりした声でこういつた。彼れは闇に慣れて来た眼で小屋の片隅かたすみをすかして見た。馬は前脚

に重味がかからないように、腹に蓆むしろをあてがって胸の所を梁はりからつるしてあつた。両方の膝ひざ頭がしらは白い切れで巻いてあつた。その白い色が凡すべて黒い中にはつきりと仁右衛門の眼に映つた。石炭酸の香はそこから漂つて来るのだつた。彼れは火の気のない囲炉いろ裡りの前に、草鞋わらじばきで頭を垂れたまま安座あぐらをかいた。馬もこそつとも音をさせずに黙つていた。蚊のなく声だけが空気のささやきのようにかすかに聞こえていた。仁右衛門は膝頭で腕を組み合せて、寝ようとはしなかつた。馬と彼れは互に憐れむように見えた。しかし翌日になると彼れはまたこの打撃から跳ね返つていた。彼れは前の通りな狂暴な彼れになつていた。彼れはプラオを売つて金に代えた。雑穀屋からは、燕からす 麦むぎが売れた時事務所から直

接に代価を支払うようにするからといって、麦や大豆の前借りをした。そして馬力を頼んでそれを自分の小屋に運ばして置いて、賭場とばに出かけた。

競馬の日の晩に村では一大事が起つた。その晩おそくまで笠井の娘は松川の所に帰つて来なかつた。こんな晩に若い男女が畑の奥や森の中に姿を隠すのは珍らしい事でもないので初めの中うちは打捨てておいたが、余りおそくなるので、笠井の小屋を尋ねさすとそこにもいながつた。笠井は驚いて飛んで来た。しかし広い山野をどう探しようもなかつた。夜のあけあけに大搜索が行われた。娘は河添かわぞいの窪地くぼちの林の中に失神して倒れていた。正氣づいてから聞きただすと、大きな男が無理やりに娘をそこに連れて行って

残^{ざんぎやく} 虐^{やく}を極めた辱^{はず}かしめかたをしたのだと判^{わか}つた。笠井は広岡の名をいってしたり顔に小首を傾けた。事務所の硝子^{ガラス}を広岡がこわすのを見たという者が出て来た。

犯人の搜索は極めて秘密に、同時にこんな田舎^{いなか}にしては嚴重に行われた。場主の松川は少からざる懸賞までした。しかし手がかりは皆^{かいもく}目^めつかなかつた。疑いは妙に広岡の方にかかつて行つた。赤坊を殺したのは笠井だと広岡の始終いうのは誰でも知っていた。広岡の馬を躓^{つまず}かしたのは間接ながら笠井の娘の仕業^{しわざ}だった。蹄鉄屋が馬を広岡の所に連れて行つたのは夜の十時頃だったが広岡は小屋にいなかつた。その晩広岡を村で見かけたものは一人もなかつた。賭場にさえいなかつた。仁右衛門に不利益な色々な事情は

色々に数え上げられたが、具体的な証拠は少しも上らないで夏がくれた。

秋の収穫時になるとまた雨が来た。乾燥が出来ないために、折角^{みの}実ったものまで腐る始末だった。小作はわやわやと事務所に集って小作料割引の歎願をしたが無益だった。彼らは案^{あん}の定^{じょう}燕麦^う売^う揚^{りあげ}代金の中から厳密に小作料を控除された。来春の種子^{たね}は愚か、冬の間を支える食料も満足に得られない農夫が沢山出来た。

その間にあつて仁右衛門だけは燕麦の事で事務所に破約したばかりでなく、一文の小作料も納めなかつた。綺麗に納めなかつた。始めの間帳場はなだめつすかしつして幾らかでも納めさせようとしたが、如何^{どう}しても応じないので、財産を差押えると威脅^{おどか}した。

仁右衛門は平氣だった。押えようといつて何を押えようぞ、小屋の代金もまだ事務所に納めてはなかつた。彼れはそれを知りぬいていた。事務所からは最後の手段として多少の損はしても退場さすと迫つて来た。しかし彼れは頑がんとして動かなかつた。ペテンにかけられた雑穀屋をはじめ諸商人は貸金の元金は愚か利子さえ出させる事が出来なかつた。

(七)

「まだか」、この名は村中に恐怖を播まいた。彼れの顔を出す所には人々は姿を隠した。川森さえ疾とうむかしの昔に仁右衛門の保証を取消し

て、仁右衛門に退場を迫る人となっていた。市街地でも農場内でも彼れに融通をしようというものは一人もなくなった。佐藤の夫婦は幾度も事務所に行つて早く広岡を退場させてくれなければ自分たちが退場すると申出た。駐在巡查すら広岡の事件に関係する事を体ていよく避けた。笠井の娘を犯したものは——何らの証拠がないにもかかわらず——仁右衛門に相違ないときまつてしまった。凡すべて村の中で起つたいかわしい出来事は一つ残らず仁右衛門になすりつけられた。

仁右衛門は押太おしぶとく腹を据えた。彼れは自分の夢をまだ取消そうとはしなかつた。彼れの後悔しているものは博奕ばくちだけだつた。来年からそれにさえ手を出さなければ、そして今年同様に働いて

今年同様の手段を取りさえすれば、三、四年の間に一かど纏まとまつた金を作るのは何でもないと思つた。いまに見かえしてくれるから——そう思つて彼れは冬を迎えた。

しかし考えて見ると色々な困難が彼れの前には横よこたわつていた。

食料は一冬事かかぬだけはあつても、金は哀れなほどより貯えがなかつた。馬は競馬以来廢物になつていた。冬の間稼かせぎに出れば、その留守に氣の弱い妻が小屋から追立てを喰うのは知れ切つていた。といつて小屋に居残れば居食いをしている外ほかはないのだ。来年の種子たねさえ工面のしようのないのは今から知れ切つていた。

焚火たきびにあたつて、きかなくなつた馬の前脚をじつと見つめながらも考えこんだまま暮すような日が幾日も続いた。

佐藤をはじめ彼れのけいべつ輕蔑し切っている場内の小作者どもは、おめおめと小作料をしばりと搾取られ、商人に重い前借をしているにもかかわらず、とにかくさしたくったく屈托もしないで冬を迎えていた。相当の雪囲いの出来ないような小屋は一つもなかった。貧しいなりに集つて酒も飲み合えば、助け合いもした。仁右衛門には人間がよつてたかつて彼れ一人を敵にまわしているように見えた。

冬は遠慮なく進んで行つた。見渡す大空が先ず雪に埋められたように何所どこから何所まで真白になつた。そこから雪はこんこん滾々としてとめ度なく降つて来た。人間の哀れな敗残の跡を物語る畑も、勝ちほこつた自然の領土である森林も等しなみに雪の下に埋れて行つた。一夜うちの中に一尺も二尺も積り重なる日があつた。小屋と

木立だけが空と地との間にあって汚ない斑点しみだった。

仁右衛門はある日膝まで這はい入る雪の中をこいで事務所に出かけて行つた。いくらでもいいから馬を買つてくれろと頼んで見た。

帳場はあざ笑つて脚の立たない馬は、金を喰う機械見たいなものだといつた。そして竹籠しつべがえ返しに跡あと釜がまが出来たから小屋を立退

けと逼せまつた。愚図愚図していると今までのような煮え切らない事はして置かない、この村の巡查でまにあわなければくつちゃん倶知安からでも頼んで処分するからそう思えともいつた。仁右衛門は帳場に物をいわれると妙にむかつばら向腹むかっばらが立つた。鼻をあかしてくれるから見ておれといひ捨てて小屋に帰つた。

金を喰う機械——それに違ひなかつた。仁右衛門は不愜ふびんさから

今まで馬を生かして置いたのを後悔した。彼れは雪の中に馬を引張り出した。老いぼれたようになった馬はなつかしげに主人の手に鼻先きを持って行つた。仁右衛門は右手に隠して持っていた斧おので眉間みけんを喰らわそうと思つていたが、どうしてもそれが出来なかつた。彼れはまた馬を牽ひいて小屋に歸つた。

その翌日彼れは身仕度をして函はこ館だてに出懸けた。彼れは場主と

一喧嘩ひとけんかして笠井の仕遂しおおせなかつた小作料の軽減を實行させ、自

分も農場にいつづき、小作者の感情をも柔らげて少しは自分を居心地よくしようと思つたのだ。彼れは汽車の中で自分のいい分を十分に考えようとした。しかし列車の中の沢山の人の顔はもう彼れの心を不安にした。彼れは敵意をふくんだ眼で一人一人睨ねめつ

けた。

函館の停車場に着くと彼はもうその建物の宏大もないのに胆きもをつぶしてしまった。不ぶ恰か好こうな二階建ての板家に過ぎないのだけれども、その一本の柱にも彼れは驚くべき費用を想像した。彼れはまた雪のかきのけてある広い往来を見て驚いた。しかし彼れの誇りはそんな事に敗けてはいまいとした。動やともするとおびえて胸の中ですくみそうになる心を励まし励まし彼れは巨人のように威いた丈だけ高かにのそりのそりと道を歩いた。人々は振返つて自然から今切り取ったばかりのよ様なこの男を見送った。

やがて彼れは松川の屋敷に這入つて行つた。農場の事務所から想像していたのとは話にならないほどちがった宏大な邸宅だった。

敷台を上る時に、彼れはつまごを脱いでから、我れにもなく手てぬぐ拭いを腰から抜いて足の裏を綺麗きれいに押拭きった。澄んだ水の表面の外ほかに、自然には決してない滑らかに光った板の間の上を、彼れは気味の悪い冷たさを感じながら、奥に案内されて行つた。美しく着飾つた女中が主人の部屋ふすまの襖ふすまをあけると、息氣いきのつまるような強烈な不快な匂が彼れの鼻を強く襲つた。そして部屋の中は夏のように暑かつた。

板よりも固い畳の上には所々に獣の皮が敷きつめられていて、障しょうじ子こに近い大きな白熊の毛皮の上の盛上るような座蒲団ざぶとんの上には、はつたんの襠袍どてらを着こんだ場主が、大火鉢おおひばちに手をかざして安座あくらをかいていた。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨にらみつけた眼をそ

のまま床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし付けられて這入る事も得せずしりぞこに逡しりぞみしていると、場主の眼がまた床の間からこつちに帰つて来そうになつた。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上になちやつにちやつと音をさせながら場主の鼻先きまでのそのそ歩いて行つて、出来るだけ小さく窮屈そうに坐りこんだ。

「何しに来た」

底力のある声にもう一度どやし付けられて、仁右衛門は思わず顔を挙げた。場主は真黒な大きな巻煙草のようなものを口に銜くわえて青い煙をほがらかに吹いていた。そこからは氣息いきづまるような不快な匂が彼れの鼻の奥をつんつん刺戟しげした。

「小作料の一文も納めないで、どの面つら下げて来臭きくった。来年からは魂を入れかえろ。そして辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿」

そして部屋をゆるするような高たか笑わらいが聞こえた。仁右衛門が自分でも分らない事を寝言のようにいうのを、始めの間は聞き直したり、補ったりしていたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたという風にこう怒鳴どなったのだ。仁右衛門は高笑いの一とくぎりごとに、たたかれるように頭をすくめていたが、辞儀もせずに夢中で立上った。彼れの顔は部屋の暑さのためと、のぼせ上ったために湯気を出さんばかり赤くなっていた。

仁右衛門はすっかり打うち摧くだかれて自分の小さな小屋に帰った。

彼れには農場の空の上までも地主の頑がんじょう丈じょう そうな大きな手が広がっているように思えた。雪を含んだ雲は氣息いき苦しいまでに彼れの頭を押えつけた。「馬鹿」その声は動ややともすると彼れの耳の中で怒鳴られた。何んという暮しの違いだ。何んという人間の違いだ。親方が人間なら俺おれは人間じゃない。俺おれが人間なら親方は人間じゃない。彼れはそう思った。そして唯ただ呆あきれて黙って考えこんでしまった。

粗朶そだがぶしぶしと燻いぶるその向座むこうざには、妻が檻樓ぼろにつつまれて、髪をぼうぼうと乱したまま、愚かな眼と口とを節孔ふしあなのように開け放してぼんやり坐っていた。しんしんと雪はとめ度なく降り出して来た。妻の膝ひざの上には赤坊もいなかった。

その晩から天気は激変して吹雪ふぶきになつた。翌あくるあさ朝うつつ仁右衛門が眼をさますと、吹き込んだ雪が足から腰にかけて薄うつつら積つていた。鋭い口笛のようなうなりを立てて吹きまく風は、小屋をめきりめきりとゆすぶり立てた。風が小風おなぐと滅めい入いるような静かさが圀いろ裡りまで逼せまつて来た。

仁右衛門は朝から酒を欲したけれども一滴もありようはなかつた。寝起きから妙に思い入っているようだった彼れは、何かのきつかけに勢よく立ち上つて、斧おのを取上げた。そして馬の前に立つた。馬はなつかしげに鼻先きをつき出した。仁右衛門は無表情な顔をして口をもごもごさせながら馬の眼と眼との間をおとなしく撫なでていたが、いきなり体を浮かすように後ろに反らして斧を振

り上げたと思うと、力まかせにその眉間みけんに打ちこんだ。うとましい音が彼れの腹こたに伝つたえて、馬は声も立てずに前膝まひざについて横倒しにどうと倒れた。痙攣けいれん的に後脚うしろあしで蹴けるようなまねをして、潤みを持った眼は可憐かれんにも何かを見詰めていた。

「やれ怖い事するでねえ、傷いたましいまあ」

すすぎ物ものをしていた妻は、振返かえつてこの様ようを見ると、恐ろしい眼付まなざしききをしておびえるように立上たりながらこういった。

「黙もくれつてば。物ものいうと汝われもたたき殺ころされつぞ」

仁右衛門は殺人者ころしものが生き残のこつた者を脅おそかすような低い皺しわ枯がれた声こゑでたしなめた。

嵐あらしが急にやんだように二人の心にはかーんとした沈黙しんもくが襲襲つて

来た。仁右衛門はだらんと下げた右手に斧をぶらさげたまま、妻は雑巾ぞうきんのように汚い布巾ふきんを胸の所に押しあてたまま、憚はばかるように顔を見合せて突立っていた。

「ここへ来こう」

やがて仁右衛門は呻うめくように斧を一寸動ちよつとかして妻を呼んだ。

彼れは妻に手伝てづわせて馬の皮を剥はぎ始めた。生臭い匂が小屋一杯になった。厚い舌をだらりと横に出した顔だけの皮を残して、馬はやがて裸身はだかみにされて藁わらの上に堅かたくなって横よこたわった。白い臄すじと赤い肉とが無気味な縞しまとなつてそこに曝さららされた。仁右衛門は皮を棒のように巻いて藁繩わらづなでしばり上げた。

それから仁右衛門のいうままに妻は小屋の中を片付けはじめた。

背負えるだけは雑穀も荷造りして大小二つの荷が出来た。妻は良^お人の心持ちが分るとまた長い苦しい漂浪の生活を思いやっておろ^{つと}おろと泣かんばかりになったが、夫の荒立った気分を怖れて涙を飲みこみ飲みこみした。仁右衛門は小屋の真中に突立って隅^{すみ}から隅まで目測でもするように見廻した。二人は黙ったままですまごをはいた。妻が風呂敷を被^{かぶ}つて荷を背負うと仁右衛門は後ろから助け起してやった。妻はとうとう身を震わして泣き出した。意外にも仁右衛門は叱りつけなかった。そして自分は大きな荷を軽々と背負い上げてその上に馬の皮を乗せた。二人は言い合せたようにもう一度小屋を見廻した。

小屋の戸を開けると顔向けも出来ないほど雪が吹き込んだ。荷

を背負つて重くなつた二人の体はまだ堅くならない白い泥の中に腰のあたりまで埋まつた。

仁右衛門は一旦戸外そとに出てから待てといつて引返して来た。荷物を背負つたままで、彼れは藁繩の片つ方の端を囲炉裡にくべ、もう一つの端を壁際にもつて行つてその上に細く刻こまかんだ馬糧の藁をふりかけた。

天も地も一つになつた。颯さつと風が吹きおろしたと思ふと、積雪は自分の方から舞い上るように舞上つた。それが横なぐりに靡なびいて矢よりも早く空を飛んだ。佐藤の小屋やそのまわりの木立は見えたり隠れたりした。風に向つた二人の半身は忽たちまち白く染まつて、細かい針で絶間なく刺すような刺戟しげきは二人の顔を真赤にして感覚

を失わしめた。二人は睫毛まつげに氷りつく雪を打振り打振り雪の中をこいだ。

国道に出ると雪道がついていた。踏み堅められない深みに落ちないように仁右衛門は先きに立って瀬踏みをしながら歩いた。大きな荷を背負った二人の姿はまろびがちに少しずつ動いて行った。共同墓地の下を通る時、妻は手を合せてそつちを拝みながら歩いた——わざとらしいほど高い声を挙げて泣きながら。二人がこの村に這入はいった時は一頭の馬も持っていた。一人の赤坊もいた。二人はそれらのものすら自然から奪い去られてしまったのだ。

その辺から人家は絶えた。吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややともすると投槍のように襲って来た。吹きまく風にも

まれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂った。

二人の男女は重荷の下に苦しみながら少しずつくつちやん俱知安の方に動いて行つた。

とどまつたい榎松帯が向うに見えた。すべ凡ての樹が裸かになつた中に、この樹だけはゆううつ幽鬱な暗緑の葉色をあらためなかつた。真直な幹が見渡す限り天を衝ついて、どとつう怒濤のような風の音を籠こめていた。二人の男女はあり蟻のように小さくその林に近づいて、やがてその中に呑み込まれてしまつた。

(一九一七、六、一三、鷄鳴を聞きつつかくひつ擱筆)

青空文庫情報

底本：「カインの末裔 クララの出家」岩波文庫、岩波書店

1940（昭和15）年9月10日第1刷発行

1980（昭和55）年5月16日第25刷改版発行

1990（平成2）年4月15日第35刷発行

底本の親本：「有島武郎著作集 第三輯」新潮社

1918（大正7）年2月刊

初出：「新小説」

1917（大正6）年7月号

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

2000年3月4日公開

2005年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カインの末裔

有島武郎

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>